

海外出張、外国旅行の危機管理

明治大学研究特別教授、地方公務員安全衛生推進協会顧問

中邨 章

テヘランへの旅と
事前準備の重要性

海外出張や外国旅行に變事や珍事はつきものである。海外出張などでは、不測事態の発生に備える危機管理能力が必要とされる。既に10年ほど前になるが、イランの首都、テヘランで開催された東アジア行政学会に出席したことがある。総務省自治大学校の関係者との出張になったが、ドバイを経由し早朝にテヘラン空港に到着した。入国審査を終えターンテーブルで預けたスーツケースを待ったが、それが一向に出てこない。日本からの代表団は、荷物の引き取りを諦め、ひとまずホテルに入ることに決めた。これまでの経験からすると、夕刻にはスーツケースはホテルに届くはずであった。

予想は当たらなかった。翌日になっても荷物は着かず、全員のスーツケースが届い

たのは、5日後、会議が終わって日本に帰する日の朝であった。これには正直、参った。数日間、着の身着のままの生活を強いられたからである。当時、テヘランにスーパーマーケットやコンビニはなかった。下着を買いに出掛けることもできず、毎晩、シャワーを浴びながら下着を洗濯し、それを室内で干すことを余儀なくされた。翌朝、乾いたところで同じ下着や靴下を再び着用するという不便な生活が続いた。

以来、海外出張には機内持ち込みのカバンに、必ず最低1日分の下着やクスリなどを詰め込み、非常時に備えることにしている。この事前準備は、その後、少なくとも3回、効果を発揮した。パリでもロンドンでもスーツケースが出てこなかった経験がある。国際行政学会の本部のあるブリュッセルには、毎年2月、理事会に出席してきたが、大雪で飛行機が遅延し空港のラウンジで一夜を過ごした思い出も残る。この時

も非常用の下着一式が威力を發揮したことは言うまでもない。

A先生の失敗から学ぶ

アメリカの首都、ワシントンに住んでいたところ、日本から行政学の碩学、A先生ご夫妻が私のところに遊びに来られた。その際、先生から驚くような話を聞かされた。先生は東京からサンフランシスコを経て、ニューヨークに着かれた。市内に近いラガーディア空港で「Aさん、Aさん」と先生を呼ぶタクシートの運転手がいた。先生はニューヨークに友人はいないし、不思議に思ったが、誰かが気を利かせて車を手配してくれたものと思っただけ。

運転手はご夫妻の荷物を持って先導し、先生はそのままタクシールに乗車する羽目に陥った。ところが、1時間前後で市内に着くはずが、空港からホテルまで2時間以上もかかったそうである。降りるとき運転手

Risk Management

は、料金500ドルを請求してきた。さすがにこれはおかしいと先生は感じたが、言葉の問題や旅の疲れで文句を言う気にもなれず、料金をそのまま払ってしまった。

ワシントンでその辺りの事情を先生と検討するチャンスがあった。なぜ、タクシーの運転手がA先生の名前を知っていたかを2人で話し合った。話し込んでいる内に、2人はハタと気付くことがあった。先生のスーツケースである。その両面にローマ字でA先生の名前が大書されていたことに気が付いた。それを見つけて名前を知った運転手は、さも友達のように先生に近づき、荒稼ぎをしたというのが実情のようであった。

最近、スーツケースは同じような色や形のものが増えてきた。しかし、それに名前を大書するのは控えた方がよい。A先生の経験からスーツケースに名前を書くのであれば、ローマ字でなく漢字を使うべきである。そうでなければイニシャルか、あるいは青や黄色の堅牢なリボンでスーツケースにつけるのが有効な危機回避策と思われる。シンガポールなどいくつかの例外を除いて、外国のタクシーは安全な乗り物でないことが多い。外国でタクシーに乗るときには、自助が原則であることを忘れてはならない。仮に運転手の名前や会社名が分かっても、タクシー内に忘れたモノ、落としたモノはほとんど間違いなく出てこない。ちな

みに、アメリカなどでタクシー運転手が差し出す領収書は役に立たない。値段を乗客が自由に書き込む市販の領収書であるのが通例である。会社名が印刷された領収書を受け取った覚えはほとんどない。

シンガポールの交通事情と利点

タクシーというと、ごく最近、シンガポールでも予想外の出来事に出くわした。シンガポールはタバコのポイ捨てに厳罰を科し、ガムの販売を禁止するなど、さまざまな規制を敷く国として知られている。中でも自動車については、車の総台数が決められているため、日本で100万台の自動車にもこの都市国家では相当な税金が附加される。価格は最低でも600万円前後にもなると聞かされた。自動車を持たない国民が多いこの国では、公共交通機関が発達していると考えがちであるが、それは間違いである。地下鉄が2路線走っており、それにバスや路面電車も利用できるが、利便性という面では問題が残る。市民の足は1万8000台（東京は4万7000台）が稼働するタクシーである。Uberが撤退した後、現在は地元シンガポールの4社がこの業界を独占している。

旅行者にとって、シンガポールのタクシーは極めて使いづらい。タクシーは流しがないため携帯で呼ぶのが一般的である。そう

でなければ、ホテルの入り口で列を作って空車が来るのを辛抱強く待つことになる。いらいらの募るシンガポールのタクシーであるが、利点もある。一つは、予約した際や車に乗った時点で、タクシーメーターに行く先までの料金が表示されることである。日本でも一部、この制度が導入され始めているが、この方法は乗客に料金について安心感を与える。同時に、運転手にとっても料金を巡って客とのトラブルを避ける危機管理策になる。国際化の発展が叫ばれる日本でも、こうしたタクシーの安全策がこの先、早急に拡散することが期待される。

筆者プロフィール

中邨 章 (なかむらあきら)

1940年大阪生まれ。1963年関西学院大学法学部卒業。1966年カリフォルニア大学バークレー校政治学部卒業(B.A.)。1973年南カリフォルニア大学大学院政治学部博士課程卒業。政治学博士(Ph.D.)。カリフォルニア州立大学講師、ブルッキングス研究所研究員、カナダ・ビクトリア大学特任教授などを経て、明治大学研究特別教授、地方公務員安全衛生推進協会顧問。

現在、自治大学校特任教授。危機管理関連の著書に『危機発生後の72時間』『行政の危機管理システム』などがある。